
BLUE sight ~ **アオキキエイ** ~

Fafunarv

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B L U E s i g h t } アオキキエイ }

【Nコード】

N 6 3 6 0 X

【作者名】

F a f u n a r v

【あらすじ】

 急激な経済成長を遂げた列強の国
 クロルシュルーネは
 「共産主義による世界統一」
 の名目で世界全体に宣戦布告を仕掛けた。

 その圧倒的な破壊力と起動性能を誇った無人兵器は
 あっという間に強豪な先進国の軍を潰して行った。

クロルシュルネの手に落ちた国々では
攻撃の非道さは更に増し、
一般人の無人兵器による虐殺を始めた。

少女アンは、目の前で家族を殺された恨みに任せ
アルベリユートにある

アルベリユート最高防衛機構の無人兵器部隊に入隊し
無人兵器「エンジェリック・ウリエル」のコントローラーとして
残酷な戦いに身を投じる事となった。

モニター越しの戦場 1

私はひたすらに腕を動かした。
擬似的に伝える手応えが
逆に生々しく感じられた。

「どうして…どうしてよ…。」

私の目の前には子供の亡骸に縋り付く
哀れな両親の姿が有った。

「どうして貴方達が泣けるのよ？」

私も

私は貴方達に家族を殺されたのに

「当然の報いでしょう？どうして泣くのよ！…どうしてそんな目で見
るのよ！…」

涙枯れ果てた親は
私に向かって石を投げつける。

カッンと音を立てた。
今、彼らの目の前にいるのは私ではない。

無人兵器
エンジニアークなのだ。

「やめてよ…。」

一瞬の静寂と機銃が装填される音の後に、
激しい機銃掃射音。

土煙が立ち、赤い鮮血が土煙を染める。

「どうしてよ！…どうしてよおおおお！…」

臓物が飛び散り

肉片がカメラにこびり付いてもなお

私は機銃を撃ち続けた。

怒り

悲しみ

憎しみ

憤り

そして復讐心

晴れた土煙からは得体の知れない肉の残骸が汚らしく地にめり込んでいた。

無人戦争と言われるこの戦いは
もう二十年経っても終結しない。
それはこの戦争で使われる兵器が
全て無人兵器だからである。

モニター越しの戦場2

「お父さん…お父さんっ！！動いてよねえお父さん！！」

父は私の目の前で
殺されました。

口から吐血し
胸部からは錆びた血の匂いが
溢れ出ていました。

私は必死になって父の
頬に縋り付いたのですが
もう父は声を上げません。

「お母さん…お母さんは…。」

父の遺体の近くには微かに息をしている母がいました。
私は呼びかけます。
母の血塗れの手を握り。

「お母さん…。」

「…あっ…ああ…。」

「うっ…嫌だよ！！死んじやいや！！」

「あ…あん…おか…さん…ぐっ…うっ…。」

「お母さっ…。」

温もりの消えた手が
スルリと私から離れた時

私は発狂したかの様に泣き叫んだと
オジ様は話してくださいました。

それから、ヴィストニア諸国は崩壊し
事実上、フェイ・シャンエイ公国の植民地と成ったのです。

「本日より配属が決まりました、ヴィストニア第二管区出身。アン・
ミスィード・タツミ・ルートリアスです。
IDはV I I A 5 0 3。年は18歳です。」

認証機に語りかける私は

どうしてだか凄くちっぽけな存在に見えました。

まだエンジニアークに乗って居ないから？

まだ人を殺めて居ないから？

タツミオジ様との楽しかった生活を投げ出した後悔があるから？

その日を私は忘れる事は無いと思います。

これは

私の葛藤の記録。

モニター越しの戦場3

私はもつとも恐れられるコードネーム、『ブルーサイト』を与えられた。

それはウリエルのコントローラーに与えられる称号でもあった。

新型機として導入されたいわゆる大天使シリーズの一機、『ウリエルAUE-000』が

制御不能になる事故が多発した時期が有った。

AIを持っていた大天使四機の中で

ウリエルだけ高い攻撃性を持ち

暴走による負担がコントローラーを襲った。

コントロールは基本的にリンク式で

痛覚は無い物のエンジェリックと同じ目線で戦いを見つめ、

エンジェリックを体と同じ様に動かした。

AIがエンジェリックに内蔵されると状況は一変する。

AIとの意志の齟齬が暴走を生み出す。

所詮AIは機械だとなめているとたちまち精神を侵食される。

そのため、大天使にはその機体のAIと同調率の強いコントローラーが配属されるのだ。

「コントローラーが精神汚染？」

私が防衛機構に配属されて一年目、演習を始める数分前の事だった。

クロルシユル―ネ戦線へ出向いていた大天使の部隊が連絡も無く基地に降り立った。

「ライルがウリエルに汚染されたつてよ…。」

「マジかよ…。」

「世界最強のコントローラーだろ？」

ライル・ポーフマンの侵食

彼の様子にみんな凍り付いた。

あの強靱な肉体は切り傷だらけで

手には血のついた刃物を持ち

かつての美しかった青い瞳は恐怖と攻撃性に満ち、光を失っていた。

大天使の強さの代償の前に

人は恐ろしさ以上の何か違う不思議な感情を抱いたという。

しかし、私は違った。

すぐさま行われたウリエルの適性検査に上官の承諾も得ずに申し込み、

同調率87%を叩き出した。

「だが素晴らしい…あのライルでさえ68%だったんだぞ。」

上官の叱咤はその言葉で終わった。

満足顔の上官と引き換えに

チームメイトは不安の声を上げた。

「ブルーサイトは蒼く染められて二度と帰って来れない証だよ…。」

「ブルーサイト？」

「そう、蒼い機影って意味。ウリエルは青い配色でしょ。だからそう呼ばれてるの。」

「そう…。」

「そう…って怖くないの！！あたしは嫌よ！！」

「リリネは此処には向いてないわ。」

「アン…酷いよそんな言い方。」

「…ごめん。だけど此処は学校とは違う、人を殺す場所よ。」
「アン…。」

私はリリネに強く言い過ぎたと黄海した。

けど、私はそれが嫌ではなかった。

リリネが憎悪に任せて人を殺す事がこの先無くなるなら。

私と同じにならないために、

ブルーサイトに違う意味で侵食されない内に
そう伝えたかった。

私が大天使に配属されて翌日。

コントロールルームに

ガブリエル

ラファエル

ミカエルのコントローラー達から呼び出された。

「君が新しいコントローラーか。」

「はい…アン・M・ルーです。」

「アン…あなた、本気でこのウリエルに乗りたいと思ったの？」
「そうです。」

ラファエルのコントローラーはそつと口を開いた。

「僕はユースケ・サイオンジだ。別に意地悪じゃないけど、君に一つだけ警告しようかと思ってね。」

「はい…。」

「大天使シリーズの中でウリエルはエンジェリーク、多く敵の人間を殺す。ヴァーチャルの戦闘しか体験して居ない君には過酷な現状を目の当たりにして耐えられるか。と言う事だ。」

人間が死ぬ瞬間なんて何度見て来た事かわからない

その時の風もこの肌からは離れない。

その時の怒りも心からは離れない。

「その心配は無用です。」

私はその言葉を

人など直ぐに殺せると

そう解釈をされても構わないと思って口にした。

「そうか、ケイト、君はまだ意見が有るんじゃないか？」

「ああ、あるさ。大有りだ。」

ガブリエルのコントローラーは私の前に立ちはだかる。

「君はどういう理由でウリエルに手を出したんだ。」

「…言わなくてはいけないですか？」

「なるほど、お前が先に言わなくてはシヤクだと言いたいんだな。」

「いえ、家族を殺された腹癒せに来たと言う以外に何か有るのかと思ひまして。」

「…家族をか、マトモな奴で安心した。」

「じゃあ、あなたは」

「俺は同調率が低い人間代表って所さ…あつと、さつきは悪かったね、ウリエルの前のコントローラーは名声を求めた者だったんでね。」

「つまり、AIとの齟齬で生まれる精神汚染を…。」

「ああ、そうだつまり俺は実験体だ。シュンレイはいいのか？」

「うん、私はアンちゃんの原因が聞けたからそれでいいわ。」

「わかりました。では出撃のシフトを取りに出ますので。」

私は何故そこまで身を捧げるのか

問いかける事はしなかった。

だいたいはわかってる。

家族の為だ。

彼が話題を変えたのはそう言う理由しかない。

「次回の出撃まであと27時間46分32秒。です。」

認証機が無機質に返答する。

モニター越しの戦場 4

夜露がハンガーを湿っぽく包んだ日

四人のコントローラーはそれぞれの天使達の機体との生体リンクを
済ませ

待機室に向かった。

「アンちゃん、初めての戦闘だけど頑張つて。」

「…ええ。迷惑にならない程度に。」

「頼もしいわね。」

「…。」

コーヒーに描かれた白いミルクの線が異様に大きく見えた。

私はよくわからない感情から凝視で気を紛らわしていたようだ。

「あまりにも耐えられないときはカメラをサーモグラフィーに切り
替えればいいから。」

「そ…そうですね、ありがとうございます。」

「私も耐えられない事ばかりだったわ。」

「…。」

「一番初めての戦闘は今から二年前。」

「はい…。」

「そのときは普通のエンジニアークに乗って戦いに出ただけど、
戦局の境界線の朝鮮半島

が見えたとき、いきなり敵軍に囲まれてね。」

「…。」

「ふふ、かしこまらなくてもいいのよ。ただお姉さんの愚痴に付き
合っただけなんだから。」

「はい。」

シュンレイさんはコーヒ―を口に含むと白く息を吐いた。

「そのときは焦ったわ。そしたら一機のエンジエリクが囿になる
と言いついてね、コントローラーが居る施設を叩いて来いと命令を
受けたので、私は追尾弾を避けながら雲の下の町に急降下したわ。」

「…うん。」

「そこは想像を絶するほどの瓦礫の山で、全く人の姿も気配も無か
ったわ。」

私達はそこをくまなく探して居ただけけれど、とある一機が炸裂弾
を撃ち込んで状況は一変したわ。」

「…というところ。」

「瓦礫に隠れていた人達が逃げ出したのよ…。」

「で、追撃したと。」

「ええ、無差別攻撃をしたわ。小さい子供からお年寄りまでみんな
ね。」

シュンレイさんはその状況を詳細に話してくれた。

人を殺す感覚

あまつさえ、機械を通して見た激しい戦場。

私の何かが揺らいだ瞬間だった。

「あなたにわかってイイと思っても、本当はわかってなんか貰いた
く無いわ。」

「それ…私はわかってる筈でした。」

「そうなの？ 私にはあなたの目にまだ蟠りが有るように見えたわ。」

「…ええ、強がりもいいトコだと思います。」

私がそうつぶやくと

シュンレイさんはそっと私の肩を寄せた。

「私はあなたに妹と同じ道を…いいえ、忘れて。」

「…。」

妹と同じ道を歩んでもらいたく無い。

彼女はそう言いたかったんだと
私は確信した。

地の底の様に静寂な時間は警告音と共に破られた。

「いくぞー！システムにリンクし待機！！12分後、クロルシュル
ーネ市街、ロストオイミヤコンへの攻撃を開始する！！」

ケイトの指示の下

システムリンクの扉を開いた。

「オジ様…私は不安です。」

リンクルームの空気を吸い込んだ瞬間

ウリエルの目が開き

私の脳に格納庫の暗い扉が見えた。

「いえ、違うわ…楽しみへの戸惑いだったわ。」

モニター越しの戦場5

「エデンより通達、現在クロルシュルネ上空にて多数の敵影を確認。作戦予定を7分29秒早める。」

「こちらガブリエル、了解。」

エデンの門が開いた。

ゆつくりと四機が格納庫から外に排出される。

「作戦開始！！」

ガクツと背中中の連結部が離れ、
白い雲の中に放りだされた。

私はすぐさま背翼を展開し
三機の後を続いた。

「来たぞ……」

雲を抜けた瞬間

敵の無人兵器が姿を表した。

こちらに気づいた三機が動きの鈍いウリエル目掛けて突撃して来た。
「……」

私は腰のブレードを手に取り
相手の胸部を切り裂いた。

炎を上げて落下する敵の残骸を追って私達も急降下を開始する。

高速で空を切って高度50メートルに到達した時は、

眼下に白銀の世界の上に立つ廃屋がしっかりと見えて居た。

まさにクロルシュルネ

かつての列強である。

「オイミヤコンには地下に中規模の無人兵器のコントロール施設が

ある。今回の作戦は施設の中枢部の破壊だ。」
「イエッサー。」

ガブリエルが炸裂弾を地上に打ち込むと、
爆風と共に瓦礫が巻き上がり
ピシピシと私の肌が音を立てた。

「さあ行くぞ。」
ラファエルとガブリエルが施設に入り込み、
辺りを警戒しながら
私とミカエルも降下する。

中は薄暗く
かるうじて唸りを上げて居た緊急警告用の電灯が辺りを黄色に染めていた。
ディスプレイに映った地図を頼りに進む。

相変わらずうるさい警告音に
聴覚の入力を落とした瞬間だった。
「ルーー！！後ろだ！！」
「え？」
シールドを展開した時
火花が散った。

急いで聴覚入力を入れると
人間の声が聞こえた。
「祖国の仇だああああ！！」
「なっ！？」

男はマシンガンを乱射しながらこちらに突撃してくる。
「邪魔よ。」
右手のブレードを男の腹部に突き立てた。

「ぐっ。」

男の腹部から勢い良く血が吹き出し
青い私の胸は赤く染まった。

私はブレードを振り払い、男を壁に叩きつけた。
唸る男に私は刃を突き立てる。

「死んで。」

吐血した口は荒い息を止めた。

「…行きましょう。」

首を失った体は冷たい床にへばりついたまま動かなくなった。
その骸を乗り越えて数人の人間が姿を現した。

「クソ…居たつてのかよ。」

私の後ろで銃を構えて居た三機が

一斉に攻撃を開始した。

私の目の前で人が銃撃で死んで行く。

私は銃を構えた。

「楽しいじゃない。」

激しい音を立てて銃が唸った。

閃光はあまりにも眩しかった。

血が私を染める。

それも楽しかった。

臓物が弾け飛び、脳みそが吹き飛んだ。

狂気の声を立てて後方の敵が退去して行く。

私が彼らに銃を向けた時、

ガブリエルが私を止めた。

「やめろ…向かって来る敵以外撃つな…。」

「…。」

私は静かに銃を下ろした。

「…俺達がクロルシユルーネの二の舞になるわけにはいかないんだ。」

「…イエス、サー。」

ガブリエルは少し私の腕を諭す様に握る。

私は深呼吸をしてから頷くと

先に作戦に戻った他の二機の背中を追った。

相変わらず回廊はあちこちに曲がりくねって
なかなか目的の場所まで辿り着かない。

地図を頼りに右に曲がると

その先に有るはずの道が塞がれて居た。

「みんな後退しろ!!」

ミカエルの一声でフロントの加速機を全力に回転させる。

バコンッ!!

と凄まじい風圧と共に

天井から重いバリケードが降下して来た。

「クソ…誘い込まれたか…」

「誘い込まれた?」

「ああ…あらかた僕らの進行路がわかってたんだな。」

「シエルターは壊せそうか?」

「いや…此ればかりは厳しいだろう。」

「そうか…」

下手すればここで四機を失う事になりかね無い。

「エデンに通達、進行を阻まれた。」

「エデンより大天使へ、AIが提示されるルートに従え。」

「了解。」

ウィンドウの地図が書き換えられた。

「よし、行こう。」

右に進み、

速度を上げる。

コンピュータ制御のシェルターの反応より先に
AIが道を選択し攪乱させる。

最後の扉を破った時にいきなり敵影が出現した。

「地上戦型の無人兵器だな…厄介だぞ…」

ガブリエルの指示で私と二機は四方に展開する。
照明弾を打ち込むと

敵の全貌が露わになった。

「ちい…こいつ、フェイの無人兵器だぞ。ここの中枢部に接続されてない…」

中枢部は無人兵器の活動を伝える部分で有り

ここをやられると接続されてる全ての無人兵器が動かなくなる。

しかしこのタイプはクロルシュルネの無人兵器では無く

違うフェイシャンエイの無人兵器だった。

「まずはここの中枢部を壊すぞ！！」

ガブリエルが銃を向けた瞬間、

ウィンドウがブラックアウトした。

「ジャミングだ！！クソ…」

炸裂弾の弾ける音と共に、

壁に叩きつけられる音がした。

「なんだってんだよクソ！！」

ガブリエルの叫び声と共に銃撃音が鳴り響いた。

「うおおおおっ！！」

ビシッと鈍いおとがして、

一瞬ブラックアウトが解かれた。

「ここだ!!」

ミカエルの声が聞こえた時

もう光が見えて居た。

ミカエルが敵の心臓部を叩いたらしい。

「死ね!!」

ミカエルはブレードを取り出すと
敵に突き立てた。

モニター越しの戦場6

「…こいつ。」

動力源を破壊した筈なのに
敵の無人兵器はまだ動く

閃光弾で目くらましを仕掛けて来た敵の懷にラファエルが潜りこむと
徒手空拳で敵の顔面を叩き割る。
しかし、相手の暴走は止まらない。

「フェイと同じでしつこい無人兵器だぜ…。」

ガブリエルは右手を蹴る。

重みでしんでいた右手がへし折れ、砲撃が止んだ。

「ウリエルは中枢部を破壊しろ!!」

「了解!!」

ブレードを右手に、

中枢部のメイン基盤目掛けて突撃する。

しかし、いきなり進行が曲げられ、地面に叩きつけられた。

私の脚には無人兵器が放ったワイヤーが絡まっていた。

「まだ動けるのかよ…。」

「ちっ!!」

ワイヤーを断ち切りつた時

後方からクロルシュルーネの無人兵器が現した。

「マズイ…多勢に無勢だぞ。」

「ウリエル、私がフェイの無人兵器を引き付けるから中枢部を。」

「はい…。」

ラファエルが無人兵器に光学砲を打ち込んだ瞬間

私はとつさに中枢部を撃った。

「基盤はもつと奥だ!!」

クロルシュルネの無人兵器が私に襲い掛かる。

私はシールドを展開し防御態勢に入る。

「行け！！ウリエル！！」

ガブリエルの攻撃でクロルシュルネの無人兵器が動きを止めた瞬間に、ブレードを持ち、基盤目掛けてもう一度突撃をした。

「いけえええ！！」

バキツと音を立てて

刃が基盤を貫いた。

すると、ぱつたりと攻撃が止み、

クロルシュルネの無人兵器は地に伏した。

「作戦完了。」

フェイの無人兵器はその後、抵抗を続けたがさすがに破損が激しかったのか

青い電気を散らしてショートした。

私達は、

直ぐに逃走を開始した。

中枢部を壊した後は服属のコンピュータ制御を書き換え
シエルターを全て開放させた。

「じゃあ帰投するぞ。」

私は最短ルートを通り、エデンが見えた時、目が覚めた様にリンクシステムから抜け出ていた。

ドサツと音がして

私は倒れ込んだ。

「はあ... はあ。」

「お疲れ、ルー。」

ケイトさんが駆け寄って来て、酸素を口に当てられた。

「初めての実践で良くやったもんだ。」

ユースケさんが中腰になってこちらを見た。

しかし、そんな喜びを噛み締めると

何か引つかかる物があつた。

それは初めて人間を殺めた事。

「う…ううっ。」

何故か涙が止まらなっか。

どうして、私はどうしてあの時楽しいと思つたのかが怖かつた。

「ルー君。」

「…わっ…私…。」

「わかつてる。どうしてこう言う事になつたのかなんて考えるな、そして己を責めてはダメだ!!」

「ケ…ケイトさん…私、ウリエルのところに…。」

ヨタヨタと千鳥足で格納庫に向かうと

ちょうどエデンに格納されたウリエルの姿があつた。

「う…。」

生臭い臭いとキツイ油の臭いとが混ざつた臭いが私の鼻に刺激を与えた。

「ウリエル…。」

ウリエルの青い装甲はまるでペンキで塗られたかの様に真つ赤に染まっていた。

その赤が私の中で何か異様な恐怖と罪悪感が込み上げて来た。

「私は…私は人を…いや…いやああああああ!!」

私はもうヨタヨタしていた事すら忘れ

一目散にメインブリッジを駆け抜けた。

「あー！アンちゃん！！」
「…うつ。」

シユンさんの顔を見た瞬間に
もう涙が止まらなかった。

「アンちゃん…どうしてカメラ変えなかったのよ…。」

「…ごめんなさい…ごめんなさいごめんなさいごめんなさい…うつ
…うつ、ごめんなさ…。」

「アンちゃん…辛いよね。私は何も出来ないけど、いつでもアンち
やんの味方だから。」

「シユン…さん…。」

「ケイトもユースケもみんなそうよ、みんな味方だから。」

「は…はいいい…。」

私はもう言葉を喋る事が出来なかった。

モニター越しの戦場7

私は奇妙な感情に支配されていた。

何故、私はこうして人を殺す事に罪悪感を抱くのだろうか

何故、私はウリエルとリンクした時楽しみを覚えたのだろうか

わからない。

わからない事だらけだ。

私の感情があまりにも歪む。

ウリエルとリンクする前は理解出来た事なのに

いざ手に掛けてみると簡単には済まされない事がわかった。

だけどわからない。

どうしてウリエルとリンクしている時は

そのような感情を抱かなかったのだろうか。

ケイトさんが止めてくれなければ

私はあと何人、人を殺していたのだろうか？

初めて人を殺した。

当たり前だが罪悪感に満たされる。

軍人、一般人と分け隔てなく

「アンちゃん。」

廊下から部屋に入ると

向かい側のリリネが私呼んだ。

「リリネ…私。」

「知ってるよ。シュンさんが教えてくれたもの。」

「…私。」

「うん…わかってる。初めてだもん。」

「そうじゃ無いの！！ウリエルとリンクするのが怖いの！！どうして！！どうして…あんなに、なっちゃったんだろって…。」

「アンちゃん…アンちゃんは優しすぎるよ。」

「え？」

「ウリエルが全部イイとは言わないけど、今は優しくなったらダメなのかもしれないよ。」

「リリネ…。」

「辛いわかるよ。おんなじ人間だもん。アグロス上官も言ってたよ。」

「上官…が？」

「うん、アグロス上官も初めて戦闘に出た時は、手が震えていたんだって…。」

「そうなの…。」

「だから、アンちゃんはもっと敵を憎まないって言いたいけど、人を殺す事に慣れて欲しく無い。」

「…そうね。」

私は個室の前にある二人掛けの椅子に座った。

「私、こうして数時間前に闘いに行って来たのにもうこうしてリリネと話が出る…。」

「うん。」

「それが不思議でならない。」

「それが無人兵器なんじゃ無いの？」

「うん。」

リリネは立ち上がった。

「昔のアルベリユート、アメリカでは40年前にもうプレデターという無人兵器が活躍していたんですって。」

「そうなんだ…。」

「中東のバラクーダはプレデターによる無差別攻撃で焼け野原になったそうよ。」

「…。」

「プレデターの操縦士はまるで出勤感覚で家を出て。モニターに映る人を殺し、ファストフードの昼食を摂りまたコントローラーを握ったそうよ。」

「…まるでゲーム感覚についてこと？」

「そう、まるでゲーム感覚の様に。操縦士はそのゲームに酔いしれる者と、非現実と現実の瞬時に起こるギャップに悩んだんだ者たちがいて、結局プレデターのような無人兵器は8年以上も凍結されたというわ。」

「じゃあどうして…。」

「世界恐慌だよ。」

「世界恐慌って…あの23年前の…。」

「うん、民主主義国家が次々と倒れて、共産主義国家が飛躍的に発展した時、クロルシュルーネとフェイだけが生き残り、クロルシュルーネ先頭に世界統一の為に無人兵器が解禁されたの。」

「…今もまた、同じ事で苦しんでるのにね。」

「うん。」

リリネは私の手をとると

ギュツと握り締めた。

「ねえ…やっぱり私、優しいアンちゃんがいい。」

「うん。」

モニター越しの戦場8

「どうだい、少しは落ち着いたか？アン！！」

格納庫に立ち寄ると

整備班の女性がこちらを向く。

「あ…え、はい。」

彼女は滑らかな黒い肌についた汚れを拭き取ると私の頭をぐしゃぐしゃと撫でた。

「はっはっ…本当に少女なんだなあ！！」

「う…。」

「なーんだ？少女って言われて不満なのかあ？」

「いえ、そういうわけでは…。」

「いいんだよ。あんたもお年頃だろ？」

「18歳ですが。」

「あーんだよ18か18か。」

彼女は笑顔で

ボンボンと私の頭を叩く。

「ランやミオを見た時は、例外かと思ったがー、本当に小っちゃいなあ。アジア圏は」

「その言い方、酷いですね…。」

「褒めてるんだよう、わからない奴だね。」

「…。」

「おっと、あたしはサブリナ。サブリナ・D・クロイラー。18だよ。」

「貴方も18なんですか。」

「そそ、あんたはアンだよな」

「はい、私はアン・M・ルートリアスです。」

「はっは、何回聞いてもいい名前だねえ。今日からあたしがあなたのエンジェリックのメインメンテナンスだよ。事前に名前と顔写真は教えてくれてたからさ。歳はしらなかったけどね」

サブリナがキャップを取って、フックに掛けると綺麗に編み込んだ髪の毛が現れる。

「あたしはあんたのこと、結構感心してるんよ。」

「どうしてですか？」

「エンジェリックのコントローラー、しかもウリエル。身を呈して相手に向かう姿。」

「…あの、私が家族を殺された仇を打つという理由で戦っててもですか？」

「あたしもそうしたいけどね。」

「え…？」

サブリナの顔から笑みが消えた。

「あんたが羨ましい。」

「貴方も…。」

「ああ、家族なら昔死んだよ。フェイの無人兵器にやられてね。」

「フェイ…ですか。」

「そ、あたしの故郷はアフリカのビルダイオ。昔、宗教対立で内戦した国。」

「スーダンですか？」

「んあ、そそ、スーダンスーダン。フェイがあたし達の国の地下資源をぶんどるためだけになぶり殺しさ。」

「レアアースですね…。」

「ん。レアアース、無人兵器のコンピュータに必要な不可欠なね。」
「なるほど。」

「シユン達、アルベリユート系のフェイ人とか亡命したのとは仲が
いいんだけどさ、フェイは昔も昔だったしね。」

「フェイがまだ中国だった頃ですね。」

「そうそう、あの国は親父が元々嫌っててさ。天地の神への冒瀆だ
ってさ。」

「たしかに、45年程前のフェイの主だった行動と言えば、環境破
壊ですしね。」

「フェイはいつんなつても自分勝手だ!!馬鹿らしい!!」

サブリナは手洗い場のハンドソープの容器を床叩きつけると、こぼ
れたハンドソープにあーあ、と言葉を漏らしながらこちらを向いた。

「あーもう!!言葉遣い!!」

「え!？」

「コトバツカイ!!敬語とか慣れないんだよねあたし。」

「ごめんなさ…あ、ごめん。」

「はっは〜!!あんたイイよイイ!!」

「はい?」

「はいじゃないって言ってるっしょー?」

「あ、うん、ごめん。」

「いよーし。頑張つて、フェイとシュル―ネぶっ潰してな!!」

バシツと音を立てるくらいの平手打ちが背中にくれられた。

「…っ。」

「痛いって言わなきゃさ、痛いってわかんないさ。自分の気持ちに
正直に生きなよな!!」

そう言つてサブリナは格納庫を後にした。

「自分の気持ちに正直…。」

今の私は痛いと言えない。

どういえばいいかわからない。

彼女は痛いと言えるから
あんなに笑顔なんだろうか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6360x/>

BLUE sight ~ アオキキエイ ~

2011年12月5日22時48分発行